Justified

セキトウ マイ

1

　はじめは、ガキの集まりだと思っていた。
　けれど、いつの間にか、彼らは一度のギグもしないままに、ディールを獲得するなんて事をやってのけた、『恐るべき子供たち』だった。
　彼らと行動を共にし、共に創作活動をするのは楽しかった。いつも１人でいる事を望んでいたはずの俺が、兄弟のようにじゃれあう彼らのペースに巻き込まれてここまでやって来た。
　あれから何年になるのだろう。
　恐るべき子供たちの中の筆頭、彼はまさにアンファンテリブルだった。
　その彼を独占し、飲み歩き、構想を共に語り、ベッドに倒れ込むんで眠ったものだ。それが、『行き過ぎた友情』に変わるまで、そう時間のかかる事じゃなかった。

　彼は僕たちから距離を置きながらそこにいた。『仲間だよ』と言っても、唇の端を上げ、皮肉な笑みを浮かべ、『そうだな』とだけ。騒ぎながら、ふざけながら機材をいじっている僕たちを眺めている彼は、まるで兄のようだと思ったものだ。それが寂しくて、僕は何度も彼を引き込もうとした。
　でも雪は溶ける事を知っている。
　僕らはいつしか、べろべろになるまで一緒に飲むようになり、物語を共に考えついた。それが形になるまで、何度も話した。やはり、べろべろになるまで飲みながら。
　あの夜の事は、僕の記憶違いだったのだろうか。ベッドに倒れこんで目を開けると、あの氷のような青い目が僕を見ていた。そうして、何かが僕の唇に触れた。

　よくふてくされていた坊やの視線には気づいていた。自分の旧友を俺に取られたと思っていたのだろう。
　新しいアルバムは俺達に成功をもたらしたけれど、自由は奪われた。
　けれど、やはり俺は『彼』と相変わらず一緒にいて、仕事が終われば、また飲みに行った。やはりべろべろになるまで。
　『行き過ぎた友情』は、たまたま起きた事ではなく、『たまに起きる事』に変わっていきつつあった。それでも怒りもせず、拒否もしない彼を不思議に思いながら。
　それでも彼が何を考えているか分からず。
　きっと嫉妬していたのは、坊やじゃなく、俺だったのだ。

　行き違うようになった心のほぐし方が分からない。
　彼の苛立ちがどこにあるのか。けれど、誰でもない、僕が原因なのだろう。
　どうにか修復したいと足掻いても、泥沼に足を取られるようなこの感覚。

　分かっていた。嫉妬していたのは、この俺だ。
　坊やでもなく、『彼』に。そして、彼を取り巻く者達に。自分は得られないものを持った者達全てに。こんな思いをするなら、『仲間』になど入らなければ良かったのか。
　スタジオの中、重い扉に彼を追い詰めて、顔を近づけてみる。ぎりぎりまで寄せて、離れた。一瞬閉じた筈の彼の目が開き、何かを問いかけていた。

　もう一度、地下室で一緒にやってた頃に戻れたら、どれだけ楽だろうか。

　彼の顔が近づいた時、思わず目を閉じた。
（そうだ、あれは僕の思い違いではなかった）
　けれど、『あの時』はもう戻らないのだ。
　彼の出て行ったスタジオで、ひとりきりなのに、背後に彼がいる気がして何度も振り返る。けれど、そこにあるのは、重い扉だけ。
　もう戻れないのだろうか。
　壊れるのを見るぐらいなら、僕が。

2

　『彼』から遠からず呼び出しがかかるだろうとは予測していた。
　もうこの『業界』から離れて久しい身ではあったが、地元にいれば噂は嫌でも耳に入る。旧友は敢えて自分の耳に入れまいとしてくれているのは、こないだ一緒にゴルフを回った時に痛いほど分かっていた。自分が去ってから辛い思いをしていた事はよく愚痴りはしても、今回の事は詳しくは話さなかった。ただ、自分達は前を向いて進むだけなのだ、とだけ、いつもの屈託のない笑顔で語っていた。
　呼び出されたのは、テラス席のある地元発祥のカフェ。天気が良くて良かった。これで雨でも降れば、屋内の席に座って、煙草が吸えない彼の不機嫌さに当たられるか、最悪の場合、煙が充満する彼の車の中で話をする事になる。
　サングラスをかけていても眩しい、珍しい日差しに目を細め、店の入口で見回すと、『彼』がやって来た。懐かしい、というべきなのか。自分の記憶の中の彼は、常に苦い思い出を伴って現れる。まるで、指先に刺さったトゲのようなものが、胸の中でちくりと疼く。
　ソフト帽に革のジャケット、シャツの上には近年彼のトレードマークともなったベスト。ポケットには、煙草のケースが見えている。
「何にする？買ってこよう」
　低く響くバリトンで囁くように言う。記憶していたより声が低くなったようだ。あれから14年も経つのだ。娘もすっかり大きくなった。自分達だって意識はしてなくても、年齢は身体的なものに出てくるものだ。そう言えば、彼も以前のような高い声は出なくなった、とファンが嘆いている、と噂に聞いた。
　彼の運んで来た2人分のエスプレッソと、喫煙者への嫌がらせのような小さな灰皿を持って、テラスのテーブルに座った。
　珍しく彼はよく喋った。昔の思い出話ばかりだ。あとの3人もいたのに、彼の中では、俺と自分の姿しか浮かばないのだろうか。その事が、俺に現実を思い知らせて、胸が詰まる。何時から、こうなってしまったのか。彼が去ってから、いや、その時も既に苦しくてしょうがなかったのだ。
「もう一度、一緒にやらないか」
「え」
　予想をしていた誘いだ。ただ、彼の声を聞き逃しただけだ。
「勿論、お前も今の仕事があるんだから、ツアーに出るとか、そこまでは言わないよ。ただ、昔のように一緒に曲を書いて、お前が地元にいて、俺が地元でショーがある時にだけでも、ゲストで出てくれればいい。俺達のファンも喜ぶ」
　『俺達のファン』。その『俺達』は何人いるんだい？
「タイミングが合わなければ、曲だけだっていいさ。俺達なら出来る。昔のように」
　彼の手がこちらの手を握ってきた。一緒に？そうして、またあの時のフラッシュバックを体験しろというのか？
　彼の手は俺の手を握ったままだった。まるで女を掻き口説くように。顔を息がかかる程に近づけてきていた。
「俺達なら、一緒にやれる。そうだろ？昔のケミストリは取り戻せる。あの頃、俺達はいつも一緒だったじゃないか」
　彼の鋭かった目は変わらない筈なのに、その視線が苦しくて堪らない。俺の手を握った彼の手が更にその手を撫でる。指で愛撫するように。多くの事が頭の中を回り始める。胸に何かがつかえ、こみ上げて来た。
「やめろ」
　俺の声は自分で思ったよりも大きかったようだった。いや、声より、彼の手を振り払った動きがというべきか。皿から放り出されたスプーンが、抗議するかのように天板の上で、彼の顔を写していた。
「前にも言った通り、俺は業界から身を引いたんだ。娘の手助けをするのが趣味ってだけの親バカなんだ。彼らも知ってることだ」
「どうしても、駄目なのか」
「あんたとだから、駄目なんじゃない。俺はもう業界からは引退したんだ。分かってくれ」
　もうショービジネスの世界には疲れた、ただ、それだけなんだよ。
「あんたなら、俺がいなくても大丈夫だ。だから」
　俺は言葉を切って立ち上がった。彼がどんな表情をしているかは、見たくなかったのだ。せめて、自分が袂を分かった時ではなく、自分に罵声を浴びせてでも、素晴らしい詞と歌声を披露してくれた彼の姿を思い浮かべて別れたかった。

さようなら。俺の…

Justified

http://p.booklog.jp/book/87017

著者：セキトウ マイ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/akafujimai/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/87017

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/87017

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ